

職業アイデンティティ形成のプロセスに関する研究 - 4～5年の現場経験を有する卒業生の語りから -

社会福祉学部 福田俊子、山本誠

1. 研究の背景・目的

2002年度に開設された社会福祉学部では、すでに5年の社会人経験を有する第1期生より、かねてから私的な集まりはあっても「職業的キャリアの積み重ね」を話す機会がほとんどなく、自己の成長を確認する場所がほしいとの要望が出されていた。また、社会福祉分野における職業的アイデンティティの形成等に関する研究については、ここ数年で幾つかの興味深い研究がなされているものの、いずれも臨床経験10年以上を対象としたライフストーリーを聴きとる質的研究が中心であり、5年未満のソーシャルワーカー（以下、ワーカー）を対象とした研究は全くない。そこで、本研究では、他の卒業生の実践報告を聴くことで、卒業生自らが自己の実践を振り返り意味づけする機会をつくること、職業アイデンティティ形成のプロセスを与えている要因を明らかにすることを目的とし、研修会を開催することとした。

2. 研究方法

臨床経験4～5年を有する卒業生を対象とした研修会を年3回開催し、そこで得られた4名の卒業生の語りをデータとした。卒業生には「臨床経験1年ごとに『印象に残っている体験』を研修会で自由に話してもらおう」形式で、1人あたり45～60分程度の話をしていただいた。内容は全て録音し、テキストデータとし、現象学的アプローチにてデータを解釈・記述した。以下に1名の卒業生のデータを示す。

3. 結果・考察

専門家としての自己を形成する時期として位置づけられる臨床1年目は、リアリティショックの連続であり、利用者支援においても失敗があるなど、無力感を抱えやすい時期である。中でも、「ワーカーとしての仕事」に魅力を感じ職業とした卒業生A（以下、A氏）の場合は、「ワーカーらしさ」をめぐり、さまざまな葛藤を抱えていたことが明らかとなった。

ワーカーの専門性は、「面接」という場における「相談業務」にあると考え就職したA氏は、「当初は、事務の仕事ばかり淡々としなくてはならないので嫌気がさしてしまい、私は事務員ではなくワーカーなのに、利用者に関わるために就職したのにと思った」と言う。しかし続けるうちに「待合室で過ごす社会性などを見ることも多く、患者さんのいろいろな一面を知ることができることに気づくようになる。

さらに、担当したケースが子どもであると、大学で学んだいわゆる面接技法は通用せず、「ケースが持てたという喜びや頑張るぞという気持ちはがたがたと崩れていきました」と話した。遊びを通した子どもとの関係づくりが続きよい反応が得られるようになると、嬉しさを感じると同時に、「ただ遊んでいるだけよいのか？」という疑問が生まれるようになる。そんなモヤモヤした気持ちを抱えている時に、先輩から「目の前にいる人のためにあなたは動いているの？」と声をかけられ、目覚めたと言う。

その時の自分を振り返り、A氏は次のように話した。「子どものためと思っていたが、結局は自分のためだったと気づいた。（中略）本当ならば子どもがどう感じていて、どう思っているかということをお大切にしなければならぬが、どこかに置き忘れていたようだった。（中略）ワーカーは利用者にとってお姉さんであったり、娘であったり、近所の人だったという、私個人だからこその会話や関係性が生まれるときもある。初めはこういった関係が、専門家として間違っていると思い、ワーカーらしくしようとしていた。」

専門家としての自己を形成する時期は、一人前になるために成長しなければならないからこそ、利用者という「自己の外側」に目を向けることは困難となり、「自己の内側」に目が向きやすい。A氏も例外ではなく、臨床1年目は「ワーカーらしさ」を巡る「自己の内側」に生じる葛藤の連続であった。しかし、そういった葛藤と向き合い吟味することによって、求めるべきは「ワーカーらしさ」ではなく「自分らしさ」であることに気づくのである。そして、このことはワーカーとして最も重要な「利用者中心主義」という価値を、A氏の身体に根づかせることにつながり、専門家としての自己を確立する第一歩となっていると考えられた。